

地域の宝を掘り起こせ

「核抜き」で持続可能な社会を 住民たちがまちづくりを模索



岩内港から望む北電の泊原発。1・2号機は耐用年数の40年まで10年以内に迫る。寿都町では核ゴミ最終処分地選びの「文献調査」を実施中で、次の段階に進むかどうかをめぐる住民投票が来年にも行なわれる。「原子力カマナー」に頼らぬ地域づくりが大きな課題だ

「核のゴミ」を埋めるより、住民の手で地域の宝を掘り起こそう」と、泊原発の地元4町村と最終処分地選定の「文献調査」が進む寿都町の住民グループが地元有識者や札幌などの研究者と始めた「地域振興プランづくり」が本格化している。6月下旬には原発地下町の福井県美浜町で半世紀にわたる反対運動を続けるかわら、林業を中心にした体験事業に取り組み松照幸さんの講演会を開催（約40人が参加）。小水力発電の可能性や地域のエネルギー事情を探る地道な調査も進む住民のところに足を運び、この地域の実態に即した「原子力カマナー」に頼らない振興策について、今秋には中間報告をまとめる予定だ。（ルポライター・滝川 康治）

美浜原発50年の軌跡にも学び 「一次資源の活用案」を作ろう

6月25日、「原発に頼らない地域づくりとは」をテーマに、福井県美浜町議の松照幸さんの講演会が岩内

町内で開かれた。

岩内4町村と核のゴミ最終処分に向けた「文献調査」が進行中の寿都町を対象に、地域の宝の発掘に取り組み住民団体が企画。すでに廃炉作業に入っている美浜町と、泊原発を

抱える4町村や寿都町を重ね合わせ、これからの地域づくりを考えることが開催の目的である。

「（原発や核ゴミ調査に）反対だけでは計画は止められません。自分たちが地域の一次資源を活用する案を作り、将来像を分かりやすく住民に訴える活動が大事なんです」

と、原発地下町で長年にわたる反対運動を続け、20年前から林業分野での地域づくり活動に取り組み松下さんが強調した。さらに、これまでの「地産地消」スタイルを転換し、地域が消費する物資を地域で生産・消費する、「地産地消」も提案。自然体験を中心とした松下さんらの地域づくり活動は、年間1億円の事業にまで成長したというから、話に説得力があった（別稿に講演要旨）。

終了後は松下さんを交えて「岩内・寿都地域振興プラン作成委員会」の検討会。今後の進め方について、座長の小田清さん（北海学園大名誉教授・地域開発政策論）は、

①エネルギー自立の地域づくりを柱のひとつに据える
②産業や生活・歴史・文化などを中心に、地域経済の循環を強めた経済社会づくりを進める

の2項目を軸に「振興プラン」をまとめるべく、調査などを進めることを提案した。参加者からは、

「この地域内からエネルギー関連資金の流出を食い止めることがキーワードになるんじゃないか」
「資材費などの高騰やFIT（固定価格買取制度）の売り上げ減もあるので、地元向けに使われない風力発電を見直すことを求めたい」
「（小規模な）自伐型林業に関心がある。木質エネルギーの利用も盛り込んでほしい」

「神内村の998温泉（閉鎖中）の源泉はアトピー性皮膚炎によく効くという実績がある。今後は、温泉を再開させ、村の事業として進めていくプランを提案したい」
といった発言が続く。松下さんは、美浜での経験を踏まえ、小水力発電やFIT終了後の風力の地域利用、女性が事業に関わることの大切さなどをアドバイスしていた。

原発地下町で漁業人口の減少 小水力発電の可能性も調査へ

「核のゴミを埋めるより、住民の手で地域の宝を掘り起こそう」と岩内4町村と寿都町の住民グループな

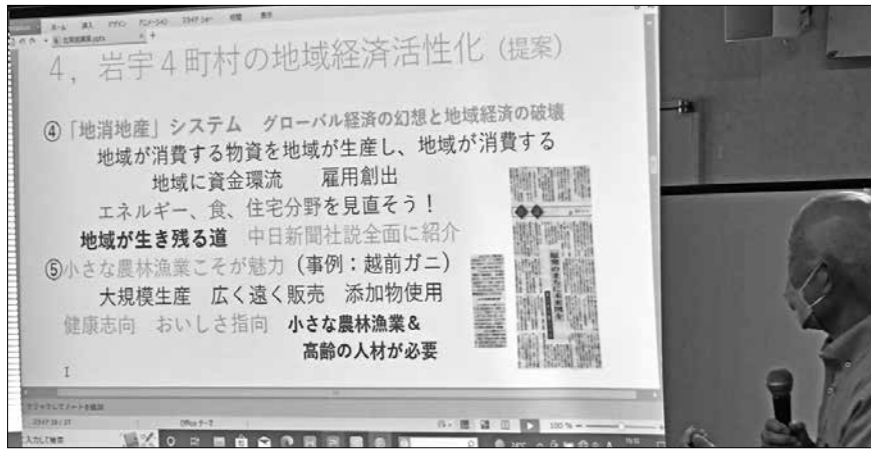
どが立ち上げた同委員会は、地元の有識者や札幌などの研究者とも連携し、「原子力カマナー」に頼らない地域振興プランを作成する。来年に予定される寿都町での「概要調査」の是非を問う住民投票や、知事選の動向なども意識しながら、自前のプランをまとめていく。

この日の委員会には、岩内4町村と寿都町の人口減少率や産業の推移、財政力などのデータが示された。結論部分を紹介しておこう。

①泊村を含む「原発地下町」化した漁業地域の人口減少率が高い一方で、原発に依存しない共和町農業地域のそれは低い
②多くの自治体は、財政力の低さから整備が遅れていたもの（生活・教育・民生施設の建設など）に「原子力カマナー」を使う一方で、逆に地域の安全対策や地場産業対策は遅れ気味

③原発周辺地域（泊、岩内・神内）では、過去30年間に漁業者が77%も減り、漁業の衰退が著しい
④泊では地域産業が衰退する一方で、原発関連の電気・ガス、サービ

に高いが、神内内村は低水準。他の3町は標準的な数値を示す
洋上風力発電やソーラー発電については、「本州資本に利益が吸い上げられ、地域還元がない」と指摘。モデルになりそうな地域づくりの事例として、子ども投票や地域連携行政を進めてきた空知管内奈井江町、村外から美術工芸高校の生徒を募集して人口減を緩やかにしてきた上川管内音威子府村を挙げている。
これで、地域の現状の一端と、めざす方向が見えてきた感じがする。
今年4月の委員会でも北大の研究者が地域のエネルギー自給の重要性に言及したところ、寿都町のメンバーから「町内にある旧水力発電所を稼働させ、地元で使えないか」との声が寄せられた。そこで、道内の小水力事情に明るい専門家とも相談し、現地踏査や近隣町村の事例の学習などに着手。今後、詳しい調査を進めていくことにしている。
9月11日には、「原発に頼らない町づくり」をテーマにしたパネルディスカッションを柱に据えて、「泊原発廃炉核こみいらない岩内集会所」が岩内地方文化センターなどで開かれる（主催は、後志・原発とエネルギーを



岩宇4町村や寿都町について、地域経済の活性化策をアドバイス

考える会」。前日は泊原発周辺の地質巡検や岩内の文化と歴史を訪ねるツアーも予定)。
検討委員会では、今後もさまざまな地域調査を続け、振興プランの「骨子案」検討などに取り組み、今秋

「原発に頼らない町づくり」を実践してきた松下照幸さんの講演から 反対だけでは計画を止められない 一次資源の活用策を住民に示そう



(まつした・てるゆき)1948年福井県美浜町生まれ。中央電気通信学園を卒業後、旧電電公社(現NTT)に就職。20代のころから関西電力美浜原子力発電所の反対運動に参加。98年美浜町議に初当選(現在4期目)。2001年NTTを早期退職。翌年「森と暮らすどんぐり倶楽部」を設立し、現在まで代表を務める。自然体験活動などを通して地域ビジネスモデルの具体化に奔走中

美浜での50年の軌跡にも学び
原発の経済神話を乗り越える
福井県美浜町では、あと10年ほどで関西電力の美浜原発が止まります。その時の準備を今からやらないと一

は「原発があることの不安」『原発がなくなることの不安』の2点で動いている」と言った。そこで僕は、後者をなくせば「原発はいらない」と思うのではないかと、と確信を持ちました。「原発がないと地域経済は維持できない」は神話です。

2002年に「森と暮らすどんぐり倶楽部」を設立し、林業分野で小

中には中間報告書をまとめて4町村の住民や行政、関係機関などに示す自立した地域づくりに向け、多くの住民が共感できる中身にできるか、関係者の手腕が試されている。

気に町が消えてしまうので、町の皆さんと一緒に「今後の地域をどうするか？」を考えています。(北海道内で)最終処分場の問題が持ち上がっていますが、美浜町では賛成・反対で地域が割れ、親戚や兄弟の中でも

小さな成功モデルを創る事業を始めました。町と県の支援を受け「倶楽部ハウス」を建設「夢を売る」「独自性を売る」「小さなシステムでやる」を経営哲学に、苦しい時には何度もド

資金難や地域の嫌がらせなど多くのドラマがあり、二度の洪水被害にも遭いました。事業をやる上で一番大事なのは修正能力だと思います。

北海道の魚介類にブランド力 地域が望む将来像を訴えよう

岩宇4町村や寿都町では、地域の一次資源を活用する案を作り、住民に理解してもらう活動が大事です。(原発や核ゴミ調査に)反対だけでは計画は止められません。地域が望む「将来像」を分かりやすく訴えたり、事業の収益性が持続性につながる。広域化をめざすことも大切です。美浜から見ると、北海道のホタテや昆布、イクラ、シラス、カキなどにはブランド力があります。すぐれた加工品の開発や消費者との意見交換、情報発信や流通の整備などをあきらめずにやり切ることです。

農林産物の活用では、地域の植生を調べたり、高齢者から学ぶシステ

分裂や確執が起きました。危険と引き換えに努力しなくてもお金が降ってくるので、物事を考えない行政や議会に成り下がりがり、多額の交付金が切れると一気に地域が衰退・崩壊していくのです。

敦賀市や美浜町では、建設技術者の購買力を狙って大手企業が入り、高額の交付金で道路や学校、立派な役場庁舎、公園などが造られました。そこには維持費用や修繕費が伴います。これらのお金はほとんど、地域外の大手の土建会社へ流れていく。

最初は美浜でも原発反対運動がありました。建設が決まり資金が回り出すと運動は消えていく。僕自身も身の危険を感じるような嫌がらせがあり、「ひとりであるしかない」と考え、反対する仲間を誘わなかった。運動を始めてもう50年を超えます。

地域では癌に罹った方がたくさんいます。20歳の関電社員が舞鶴市民病院で白血病とされて専用施設を持つ関電病院へ連れていかれ、そこで亡くなりました。それを聞いた僕は初めて、「おかしい。地域の白血病患者を強く持ち始め、それまで持っていた原発のイメージを切り捨てた。

ムが必要でしょう。年配の女性が働き、地域をリードする仕組みを創ると最高の魅力になります。

岩宇4町村や寿都町と札幌との直線距離は60〜70キロ。これも美浜町より好条件です。地域からの営業や発信、価格交渉力が決め手になる。「米1俵16万円」を合い言葉にするこ

自然体験で1億円事業を実現 女性たちの活躍が成功のカギ

「森と暮らすどんぐり倶楽部」では教育旅行の誘致に力を入れてきました。そこには自然体験のマーケットがあります。リスクのある体験を旅行のメニューに入れ、事業のプログラムを作る。すると、たくさん人が美浜を訪れるようになり、民泊が足りなくなりました。優秀な営業マンがいて、1学年2百人の学校の生徒がやってきた。東京から参加すると一泊6千円を払います。小さくて誠実な旅行会社を発掘することです。

「どんぐり倶楽部」では、森の案内や

これが美浜原発反対運動の歴史のスタートでした。

美浜原発は現在、1・2号機の廃炉が決定し、3号機は8月に運転を再開するとの情報が流れています。建設から60年弱、町は原発のリップス(入れ換え)を声高に叫んでいる。素晴らしい砂浜を求めて関西から大勢の人が訪れる観光資源を持ちながら、これを活かさないのです。

しかし関電は、原発を増設しません。最近の日経新聞の記事に「関電は2040年に向けて1兆円の再生可能エネルギー投資をする」とあり、これは「原発から撤退する」というメッセージです。脱炭素社会に向けて方針転換したと明確に言えるのではないか。

50年以上も原発に反対してきて、我々は東芝や三菱重工、日立、IH1、川崎重工など原発メーカーの原子力部門を潰してきました。毎年1〜2基の原発を造り続けなければ、メーカーは技術も組織も維持できないからです。新設を認めなかった効果は大きい、と誇り高く言えます。

2004年、美浜3号機で11人の死者を出す事故が起きました。その時、地元農協の組合長が「町民新割り&ピザ焼き、ツル細工と山野草の植え込み、シロップ作り、杉の間伐などの体験事業を2千円〜5千円/人で受け入れ、美浜町の1億円産業に伸びました。僕も74歳になりましたが、今年の体験事業の受け入れでは本当に忙しかった。

我々が使っているエネルギーや食べ物、住宅を出来るだけ地域で生産する「地消地産」をやると、岩宇4町村と寿都町で何百億円というお金が回ります。地域が生き残る道は、ちよつと努力すればできる。僕にとつて、小さな農林漁業は魅力的に映ります。本当にうれしいものを消費者に提供しようと思つたら、大きなものではダメなんです。

もうひとつ、エネルギーの地域自給をめざしてほしい。例えば木質チップを燃料にして80度以上のお湯を沸かせば、それで冷房もできる。そうしたものを、この地域でもぜひやってもらいたい。僕らの事業は、女性が関わらなかつたら失敗だと位置づけています。女性はよく笑い、よく話す。こういう素晴らしい人的資源を使わないと地域は伸びていきません。そのことを頭の中心におき、取り組んでいただきたい。

※筆者のHP「滝川康治の見聞録」<https://takikawa-essay.com/> に本シリーズの過去記事を収録しています。ご参照ください。